



平成 30 年度 苫小牧市非核平和事業

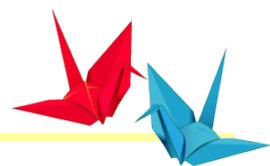
平和の翼

苫小牧市中学生広島派遣事業体験感想文集

苫小牧市総合政策部政策推進課

目次

◆	中学生広島派遣事業を終えて「苫小牧市職員 辻 寛太」	▶	1
◆	凌雲中学校 3年 川村 凜々羽	▶	3
◆	沼ノ端中学校 3年 澤田 彩	▶	5
◆	啓明中学校 3年 高木 幸大	▶	7
◆	和光中学校 3年 山本 舞羽	▶	9
◆	勇払中学校 3年 北條 愛紗	▶	11
◆	事業の様子	▶	13
◆	苫小牧市非核平和都市条例条文	▶	19



苫小牧市総合政策部政策推進課
主事 辻 寛太

本事業は、次代を担う子どもたちが被爆地である広島を訪問し、戦争と平和に対する意識を高め、広く市民に平和の尊さを考える機会を設けることを目的に実施している事業で、平成7年から行われています。今年で24回目を迎え、派遣された人数は今回の派遣者を加え125名となりました。

今年度の派遣事業は、7月20日に事前学習と市長表敬を終えて、7月25日から27日までの3日間の日程で行いました。

研修初日は、早朝に苫小牧市役所を出発し、新千歳空港から羽田空港、羽田空港から広島空港へ乗り継ぎ、広島市内へ移動しました。その後、最初の研修場所となる平和記念資料館へ向かい、被爆体験者である”豊永 恵三郎”さんより体験講話をしていただきました。当時9歳だった豊永さんは広島でお母さんと幼い弟さんの3人暮らしをしており、原爆が投下された8月6日の朝は、豊永さんは通院のため爆心地から10km離れた場所において爆撃を直接受けることはありませんでしたが、お母さんと弟さんを探しにいった際に、残留放射線により被爆したそうです。原爆の後遺症と向き合いながら、自らの体験を若い世代に語り継ぐ活動をすることによって、原爆と戦争のない平和の尊さを伝えてくれています。現在減りつつある語り部さんの貴重な話を聞くことができ、資料や写真から得る情報よりも具体的に状況を理解することができました。感情のこもった話を聞くことで、派遣者たちも何か感じるものがあったのではないかと思います。

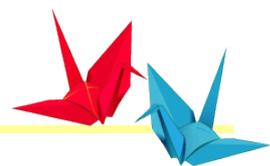
その後、同資料館内を見学しました。館内は混雑しており、見学者の半数近くが外国人であることに驚きました。派遣者たちは、熱で曲がった瓶を触ったり、タッチパネルで歴史を学んでいました。

研修2日目は、平和記念公園を訪れ、苫小牧市民の皆さんや派遣者の学校の生徒さんが平和の願いを込めて折った千羽鶴を原爆の子の像に奉納しました。その後、本川小学校を訪れ、最初に敷地内にある慰霊碑に献花を行い、ガイドの“岩田 美穂”さんのお話を聞きながら本川小学校平和資料館を見学しました。この資料館は、原爆に耐えた旧校舎の一部を使用しています。ガイドの岩田さんは自らも卒業した本川小学校の様子や、母親の被爆体験を語り継いでおり、被爆後に本川小学校が臨時病院となったことや、グラウンドで遺体を焼いていたことなど、当時の話をわかりやすく聞かせてくださいました。被爆した当時の建物の中で話を聞くという貴重な体験ができました。

広島は苫小牧と違い非常に蒸し暑く体力を消耗しましたが、無事3日間の研修を終えることができました。研修の目的は平和について学び伝えることですが、派遣者たちはそれ以外のことも多く学び有意義な研修になりました。それぞれ感じたことを少しでも多くの人に伝えてほしいです。



最後に、今回の広島派遣事業を実施するに当たり、御理解と御協力をいただいた皆様にこの場をお借りして感謝申し上げます。



苫小牧市非核平和条例に基づき、その中の活動の一環である苫小牧市中学生広島派遣事業の一員として、平成30年7月25日に広島県へ向かいました。

教科書でも戦争についての学習はしていましたが、教科書では学べない貴重な体験を現地ですることができました。今回、平和記念資料館の見学と語り部の豊永さんから話を聞き、翌日には本川小学校に行き岩田さんの祖母が被爆した際の話聞くことができました。

初めに豊永さんから原爆が投下された時の話を聞いた。豊永さんは爆心地から10km離れた場所にいたと言う。

1945年8月6日午前8時15分、広島に「死の爆弾」が投下された。広島には大きな雲ができて、それを黙って見上げていたが街に戻らなければいけないと思い、列車が来るのを待っていた。列車は来たが、中から降りてきた人達の髪は焼け焦げ、腕を前に出した状態で皮膚は黒く焦げて垂れ下がり、まるで幽霊のようだったと。初めは怖かったが、何百人もの人が同じような状態で街の中をさまよう情景を見ているうちに慣れていったそうだ。広島は一発の原爆によって一瞬にして黒焦げの街へと変化してしまった。原爆ドームの近くでは建物疎開（道路を広げるため）の作業をするための集合場所になっていたため、中学生などの子供がたくさんいた。被爆しながらも自分の家族を捜し、避難する場所を求めていたと。豊永さんの話を聞いていると、当時の悲惨な情景が頭に浮かび上がった。

平和記念資料館では、教科書では見る事ができないような悲惨な写真が多く展示されており、目を覆いたくなるような物もあった。その中でも私が印象的だったのは、顔面の皮膚が溶けてしまい、口は開いているが目が開けられない、



鼻も変形している写真。見た瞬間、怖くなってしまい、自分のカメラに収めて良いのか躊躇してしまった。その写真は今でも忘れない。

本川小学校は広島で一番初めに建てられた鉄筋の校舎だった。地下もあり、L字型の3階建てで自慢の学校だったが、原爆投下後は救護所として使われた。最初は治療するが、死亡する方が増え、学校のグラウンドで遺体を焼いてそのまま埋めていた。匂いを消すために石灰を撒き、その上に更に遺体を重ねてい



た。遺体を燃やす火は毎日消えなかったが、「また死んでいる」という思いはあるが、悲しむことも徐々になくなった。校舎を建て替える際には基礎工事で地面を50cm掘り返した時に石灰や遺骨が出てきたそうだ。戦争によってたくさんの命が奪われたが、日常的に人が亡くなることで、生きている人の心も蝕み、人としての感情を麻痺させてしまう。

現在の原爆ドームは整備されてきれいに保存され、世界遺産にもなっている。私達が資料館を見学していた時も外国人が多くいた。73年前の広島であれだけの甚大な被害があったが、現代においても核兵器開発や核実験などが行われている。戦争を知らない世代の人達、世界各国で平和について考えてもらいたい。世界の中で唯一の被爆国である日本。悲しく悲惨な過去を振り返ることで同じ過ちを繰り返してはならないという強い思いと平和を維持するために自分達にできることは何かを考えることが必要だと思う。

今回の広島派遣で私達の日常が戦争によって非日常に変わってしまうことへの恐怖感を感じた事や戦争のない世界を強く望むと共に改めて平和の大切さを学ぶ事ができた。そして、今回学んだ事を1人でも多くの人に伝える事で、平和への意識が高まる事を願っている。



1945年、8月6日、午前8時15分。一つの原子爆弾によって、一瞬にして広島町は炎につつまれ、たくさんの人々の命を奪いました。この恐ろしさを、身近に感じることができなかった私は、自分の目で、広島という町で起こった当時の様子などを知りたいと思い、今回の中学生広島派遣事業に参加しました。

研修一日目、広島平和記念館で、豊永恵三郎さんから被爆体験を聞くことができました。当時9歳だった豊永さんは、耳が悪かったらしく、治療のため爆心地から10キロ離れた場所にて、怪我はしなかったそうです。家族のことが心配になり、広島駅へ行く列車を待っていると広島駅から頭の髪が焼けてチリチリになっている人、顔がやけどによって、目や鼻があるかわからないほどに腫れ上がっている人、手を前にして、垂らしている指先には自分の肩や腕などの皮膚が真っ黒に垂れ下がっていて、ゾロゾロとでてくるのが、すごく怖かったと語っていました。その後、平和記念資料館を見学し、豊永さんから話を聞いて、頭で想像していた写真よりはるかに、目を反射的にふせてしまうほど、悲惨な写真の数々で自然と涙があふれていました。他にもボロボロになった服、サビついた三輪車、8時15分で止まっているボロボロの腕時計などから、戦争の悲惨さを身近に感じ、本当の恐ろしさを知ることができました。



研修二日目、爆心地から350メートル離れたところにある本川小学校の平和資料館を見学しました。そこで、ガイドの岩田美穂さんから母親が体験したお話や当時から現在までの小学校の様子を詳しくお話いただきました。当時、本川小学校は鉄筋で建てられていたため、ボロボロにはなりませんが、崩れる

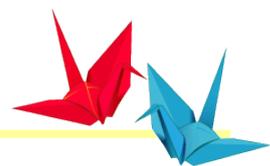
ことはなく、そこを救護所として、たくさんの人々が運ばれてきました。だが、その頃はただ横たわるだけで、治療などはできず、毎日のように死者がでました。その死者を、グラウンドに大きな穴を掘ったところに置いて火をつけては、においを消す石灰をまいてを朝から夜まで、一ヶ月ぐらい繰り返したそうです。



なので、建物を建てかえる際、遺体が焼けた「黒」、石灰の「白」の層が100メートルにも及ぶ深さで発見されました。

この戦争の恐ろしさは、写真や原爆ドームからでもわかるように、二度と繰り返してはいけないものだと思います。だから今、日本は平和、戦争なんてないと、遠い昔のように思っていた戦争が再び起こるかもしれないと一人一人が平和について考えることが、これからの未来につながると思います。なので、広島の方々から渡された「平和のバトン」を一人でも多くの人につなぎ、これからの平和な世界をみんなで

つくっていききたいです。



一九四五年八月六日八時十五分。広島町は一瞬で灰となり、地獄と化しました。

ガラスを溶かし、人を蒸発させるほどの熱。物を吹き飛ばし、建物をなぎ倒すほどの爆風。人間の身体を蝕み続ける放射線。この三つを備える原子爆弾が落とされたのです。

今回の広島派遣の前の私の戦争の知識は、広島と長崎に原子爆弾が落とされたということのみでした。しかし、語り部の体験講話や資料館見学を通して「恐怖を超えたまた別の何か」を感じました。

語り部の体験講話を聞くと、原子爆弾が落とされたその日、その場所には建物疎開をするため大人だけではなく子どももいました。原子爆弾が炸裂した時、爆弾が落とされたときの行動を咄嗟に行ったがそれを超える速さの熱と光、熱風が襲ってきたそうです。その時、語り部の一人の豊永恵三郎さんは原子爆弾の被害を受けなかったところにいました。しかし、家族は建物疎開のため原子爆弾の落ちたところに行っていました。豊永さんは自分の家族のことが心配で祖父と探しに行きました。その道中、見た物はまさに地獄そのものだったそうです。向こうから歩いてくる「もの」は、それが人かどうかわからないくらいに着ているものはボロボロ、顔は火傷でふくれあがり目がどこかわからないものもいました。そして、焼けて真っ黒になった皮膚は指の先にぶらさがっていました。それを見た豊永さん当時9歳はただひたすらに怖かったそうです。そこから六十年経ったとき、身体に二つの癌が見つかりました。それは放射線の影響でした。

もう一人の戦争について語ってくださった方は被爆者二世の岩田さんでした。岩田さんは原子爆弾によって被害を受けた「被爆者」そしてもう一つ、放





射線をあびたという意味の「被爆者」がいるのだといいます。放射線は身体に様々な影響をもたらしました。その一つが佐々木貞子さんの白血病です。

岩田さんは被爆者二世で実際に被爆したのは母でした。母は中学生の時に被爆、その前の日に家族写真をとっていました。しかし、当時、写真を現像するには日数を必要としました。8月6日原子爆弾投下。一瞬で町は灰となりました。しかし、奇跡的に生き残りました。その後、家族写真を受け取りました。その時、言葉にできない感情が体を駆け巡りました。

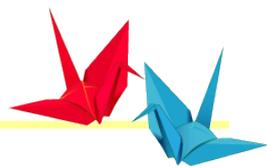
それから何十年も経って再び家族写真をとることになりました。しかし、母はそれをこぼみ続けたという。

これが原子爆弾の脅威であり、戦争というものです。資料館にはもっと多くの被害の跡が残されていました。

私はこの資料館に行って驚いたことがあります。それは、外国人がいたことです。もしかしたら日本人よりもいたかもしれません。ただ、それだけのことに驚きました。

世界で一つだけの被爆国、日本。語り部の豊永さんは「ヒロシマの心を伝えてほしい」、「平和のバトンをつないでほしい」、資料館で見た「世界の人々が平和について考えている瞬間」はまさにそれらだったのではないのでしょうか。

あれから73年経った今の日本。戦争の経験者はほとんど減っています。だからこそ、今を生きる私達が再び平和とは何かを考え、平和のバトンをつなげていくべきなのではないのでしょうか。私はそうしていきたいです。



耳をつんざくような蝉時雨に、照り付ける太陽。雲一つない青空。7月25日、私達は広島の地に降り立ちました。ホテルから広島平和記念資料館へ向かう中で平和大橋から見える青々とした木々、銀色に輝く高層ビル群が建ち並ぶ街並みの中に、ドーム型の鉄骨と外壁の一部だけが残るこげ茶色の原爆ドームが目に入り、そこだけが73年前のあの日から時間が止まっているように感じました。平和記念資料館に入った瞬間、外国人の見学者の多さに驚き、世界中から関心を持たれている特別な場所に来たのだという緊張感が走りました。私達は被爆者である豊永恵三郎さんから当時のお話を伺い、そのあと2階の資料館に向かいました。広島市街地を模した白いジオラマに原爆投下時のCG映像を投影し一瞬で街が破壊された様子を再現するホワイトパノラマを見ました。



B29よりも更に高い空から広島を鳥瞰している不思議な感覚。上空から見た広島は太田川と元安川に挟まれ、大きな三角州の中には沢山の住宅、小学校、病院。川にかかる相生橋の横には路面電車が走り、綺麗に整備された道路には、車が走り、川には小さな船も何艘か見えます。ふと想像したこと、朝の喧騒の中、電車に乗って通勤する人、車で走り、建物疎開のために学校に集合した生徒達。住宅の小道で涼しいうちに三輪車で遊ぶ子供達。お弁当を忘れた子供を追いかけて走るお母さんもいたかもしれません。朝の慌ただしさや人々の息遣いが感じられる生活風景そのものです。私の1日の始まりと変わらない日常がそこにはありました。

その時、激しい轟音の中、1発の原子爆弾が投下されました。何とも形容し難い、今まで聞いたことのない爆音とともに黄色い閃光が走り、その直後、灰色の雲が炎と共にモクモクと眼下に迫ってきます。一瞬で廃墟と化した白と黒の街並み。その瞬間まで、確かに息づき、輝いていた朝の光景はもう何一つ感じられません。私は強い衝撃と深い焦燥感に襲われました。想像もできない世界がそこに広がっていました。その時、豊永さんの講話が現実味を帯びて私の胸に迫ってきました。当時9歳だった豊永さん。「家族を捜すために駅で電車を待っていると、広島市から電車がやってきた。中から出てきたのは髪の毛が焼け焦げ、顔が火

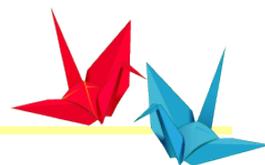
傷で腫れあがり、目や鼻がどこにあるかもわからない人や、肩や腕の皮膚が手の先に垂れ下がって真っ黒になっている人だった。怖くてたまらなかった。まるで幽霊が次々と現れてくるようだった。母と弟を捜しに広島市内へ行くと、ひどい火傷を負った人が水をくれと叫んでいた。怖くてずっと下を向いて歩いた。母を見つけられたのは、弟と一緒にいたからだ。もし、弟がいなかったら母だと認識するのは難しかった。それくらい母は酷い火傷を負っていた。道には亡くなった人が山積みになって燃やされていた。それを見て何とも思わない自分がいた。」と悲しそうに話して下さいました。その時は、ただ恐ろしい気持ちで聞いていました。パノラマで原爆投下直後の何も無く焦土と化した広島を街を見て、人々が阿鼻叫喚している地獄絵図のような惨状の中では、人間は感情をも失い、心も体も抜け殻のようになってしま



まうのだと思いました。資料館の展示品の中には血痕のついたボロボロの学生服、8時15分で止まった腕時計、原形を留めていない赤く錆びた小さな三輪車、その一つ一つに持ち主がいて、原爆によって苦しみながら亡くなっていった無念の思いが私たちに語りかけてくるような気がしました。

大きな折鶴を空に掲げる貞子さんの像に苦小牧市の皆さんと私達中学生とで平和への祈りを込めて折った千羽鶴を捧げてきました。原爆の子の像を囲むように手向けられた色とりどりの膨大な数の千羽鶴。世界中の人々の「ヒロシマの原爆の悲劇を2度と繰り返してはならない。」という強い願いがひしひしと伝わってきました。

今回の研修を終えて初めて戦争というものが現実味を帯びたものとして私の心に刻み込まれました。そして、罪のない多くの人の命を、夢を、希望を、家族を、大切な人を、そして未来をも奪う戦争に対して強い憤りを覚えました。世界では今も戦争が起こっています。戦争によって得られるものは何にもありません。苦しみ、悲しみを生み出すだけです。1日も早く世界から戦争をなくすために私たちにできることは何か。それは「戦争はダメだ」と声を大にして叫び続けること。周囲に対して思いやりの心を持ち、自分と異なる意見にも耳を傾けること。互いを理解しようと努力することなのではないでしょうか。広島の方々から受け継いだ平和のバトン。14万人以上の命が奪われたヒロシマの悲劇をもう2度と繰り返さないために、このバトンを多くの人へと繋いでいきたいと思います。



1945年8月6日午前8時15分。

美しかった広島は、一つの原子爆弾によって一瞬にして焼き尽くされ、そして同時に多くの人々の命が失われてしまいました。その戦争の悲惨さは計り知れなく、教科書からは学びきれません。私自身の目でその恐ろしさを知り、心で感じたいと思い、苫小牧中学生広島派遣事業の一員として貴重な体験をさせていただきました。

研修一日目、平和記念資料館・平和記念公園へ行きました。広島に着いた時、本当にここに原子爆弾が落ちたのかと疑ってしまうほど、街はきれいになっていました。しかし、平和記念資料館へ行き、語り部さんのお話を聞いて、戦争という真実の恐ろしさが伝わってきて胸が締めつけられました。

語り部さんである豊永さんよりお話を聞きました。豊永さんはたまたま爆心地から離れていたため火傷などはなかったのですが、豊永さんの母と弟は爆心地の近くにいたそうです。母は危ないと思った瞬間に弟をかばった為、弟はほとんど被害がなかったのですが、母はひどいやけどを負い、顔はぱんぱんに腫れていたと聞きました。豊永さんは母と弟と離れていたので再開するにも時間がかかったと語ってくれました。9歳の子どもがこんなに辛い思いをしたと思うと本当に心が痛くなりました。

資料館の中には、当時の写真や衣服などが展示されていました。服はほとんどボロボロになっており、時計や三輪車なども焦げていて今にも壊れそうな状態でした。写真は想像を絶するもので、見るのも辛く、その写真の1枚1枚から当時の人々の苦しさや原子爆弾の被害の恐ろしさが感じられました。その後見てきた原爆ドームは、元々他の建物より頑丈に作られていましたが、半分以上



がなくなっており、実際目の当たりにし、更に原子爆弾はあってはいけないものだとは強く感じました。

二日目は本川小学校を訪問しました。そこで被爆二世である岩田さんのお話を聞かせていただきました。本川小学校は臨時病院だった為、毎日沢山の人が亡くなり、今も尚グラウンドは掘り返すと骨等が出てくるそうです。それが当たり前と語られたことがとても恐ろしく感じましたが、その悲惨な状況になってしまう戦争は本当に恐ろしく、二度と繰り返してはいけないと痛感しました。



私はこの研修で「戦争」というものの恐ろしさを改めて知りました。そして同時に「平和」についても深く考えさせられました。今は、広島に原爆が落とされた時代より技術が進歩しています。もし戦争が起こってしまえば、今まで以上に悲惨で恐ろしい結果になってしまいます。そうならないために私達ができること。それは、一人一人が戦争を起こしてはならないという強い思いと意識を持ち、努力を重ねて、繋げていくことだと思います。もう二度と戦争を繰り返さないために私は多くの人に戦争や原爆、平和について広めていきます。

事業の様子

平成 30 年 7 月 20 日（金） オリエンテーション・事前学習・市長表敬

研修当日の役割分担やスケジュール、注意事項を確認し本番への準備を行いました。

その後、事前学習として原子爆弾投下後の広島ビデオを鑑賞し、研修本番に向けて平和学習をしました。



オリエンテーション・事前学習終了後に、広島派遣者で市長表敬を行いました。

それぞれ自己紹介を行い、研修に対する意気込みや研修に参加した動機を語り、岩倉市長から激励の言葉をいただきました。

6月1日～15日まで設置していた、折り鶴コーナーにより、今年度も市民の皆さんからたくさん折り鶴をいただきました。

集まった折り鶴を苫小牧駒澤大学ボランティアサークル「ひまわりの会」のみなさんに千羽鶴にしていただきました。

御協力ありがとうございました。



平成 30 年 7 月 25 日（水）～27 日（金） 本研修

《1 日目》 7 月 25 日（水）

- * 語り部・豊永恵三郎さんによる被爆体験講話を受講
広島平和記念資料館見学

《2 日目》 7 月 26 日（木）

- * 広島平和記念公園内「原爆の子の像」へ千羽鶴を奉納
- * 本川小学校平和資料館慰霊碑へ献花
ガイドの岩田美穂さんによる解説と見学
- * 世界遺産「厳島神社」見学



《3 日目》 7 月 28 日（金）

- * 帰省

豊永恵三郎さんによる被爆体験講話、広島平和記念資料館見学

1945年（昭和20年）8月6日午前8時15分。広島に世界で初めて原子爆弾が投下され、その年の12月末までに約14万人の人々が亡くなりました。広島平和記念資料館は被爆の実情を伝え、核兵器のない平和な世界の実現へ貢献するため設置されました。資料館では黒こげになった弁当箱、8時15分で止まった時計、被爆した動員学徒の学生服、高熱でとけたガラス瓶などの被爆資料を展示しています。

資料館見学前には、語り部の豊永恵三郎さんから被爆体験についてお話をしていただきました。

▼語り部の豊永さんと



▼平和記念資料館を見学する様子



平和記念公園、本川小学校平和資料館

【平和記念公園】

派遣者の在籍する各中学校の生徒が作成した千羽鶴と、苫小牧市民の皆さんから寄せられた折り鶴で作成した千羽鶴を『原爆の子の像』へ捧げました。



【本川小学校】

本川小学校は爆心地から350メートル離れたところにあり、原爆によって約400人の児童と校長先生のほか10人の教師が一瞬にして命をうばわれました。

この平和資料館は、昭和3年に広島で初めて建てられた鉄筋3階建ての校舎の一部で、被害を受けた状態をそのまま残し、被爆の「証」として保存されています。展示されている写真や遺物には、多くの人々の悲しみや願いが込められています。

ガイドの岩田美穂さんから岩田さんの母親が体験したお話や当時から現在までの小学校の様子をお話いただきました。



▲ガイドの岩田さんからのお話



▲慰霊碑へ献花している様子

終戦の日に行われた平和祈念式典では、山本さんが派遣者を代表して広島派遣の体験感想文を發表し、派遣者全員で平和の誓いを朗読しました。



▲「平和の誓い」を朗読する様子

▼体験感想文を読む山本さん



『平和の誓い』

一九四五年八月六日、午前八時十五分、ヒロシマの街は一瞬にして火の海と化しました。火傷によって皮膚が焼けただれた人。水を求め倒れていく人。大切な家族を失った人。原爆が投下されたあの日から七十三年が経った今、日本では戦争は起こっていません。それは、戦後日本国民が「戦争を繰り返さない」という強い意志を持ち行動していたからです。「平和は待っていてもやってはこない。自分達で創り上げていくものである。」と今回の研修で学びました。

近年、当時の様子を知る人は減ってきています。だからこそ、戦争を経験していない私達が戦争についての知識を持つこと、平和とは何かを考え、行動していく事が大切なのです。

今回の研修でヒロシマの方々から受け取った「平和のバトン」。

このバトンを、次は私達が沢山の人へと繋いでいかななくてはなりません。

戦争をもう二度と起こさない。平和な日本を、平和な世界を創り上げていくという気持ちを持ち続け、私達がヒロシマで受け取ったこのバトンを繋いでいくことを誓います。

事後研修～各中学校での体験発表～

▼沼ノ端中学校 澤田さん



▼凌雲中学校 川村さん



▼和光中学校 山本さん



▼勇払中学校 北條さん

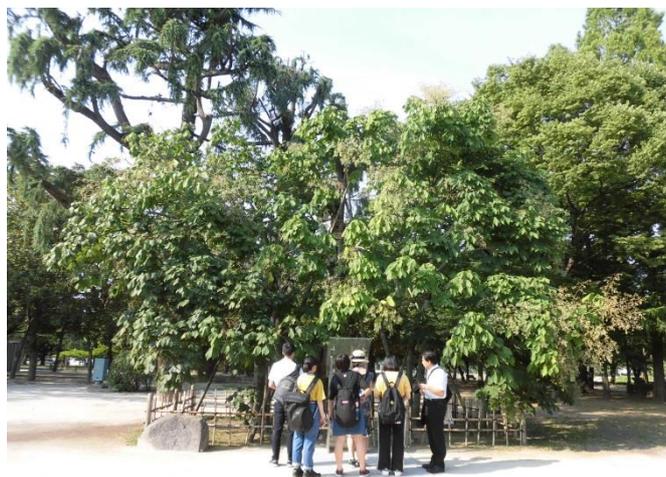


広島派遣事業の事後研修として各中学校で派遣者による体験発表を行いました。実際に被爆地に行き、感じた事や見たものを他の生徒達にも伝え、平和について考えてもらう時間を設けました。それを聞いた皆さんは、家族や友人に伝え、一人でも多くの市民の方々に広がることを願っています。協力していただいた各中学校の皆様ありがとうございました。

その他 本研修の様子



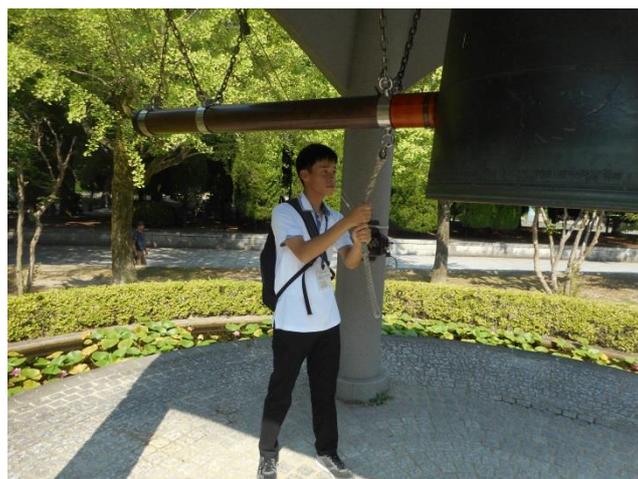
▲平和記念資料館のホワイトパノラマ。
米軍の B29 から投下された原子爆弾が、雲を抜けながら広島街に迫ります。一瞬、真っ白な無の世界になった後、赤みを帯びたきのこ雲が湧き上がり、変わり果てた街の姿が写真で映し出されます。



▲平和記念公園の被爆アオギリの木。
被爆し、幹の半分が焼け焦げましたが、翌年の春、枯れ木同然だった幹から新芽が芽吹き、人々に生きる希望を与えました。



▲平和記念公園の「原爆の子の像」。
2歳の時に被爆した佐々木貞子さんが、10年後に白血病で亡くなったことをきっかけに、同級生たちが慰霊碑をつくろうと呼びかけ、昭和33年に完成しました。



▲平和記念公園の「平和の鐘」
鐘の音を広島から世界へ響きわたらせ、全人類の心に平和をしみわたらせることを願いながら、派遣者全員で鐘を鳴らしました。

苫小牧市非核平和都市条例

わたしたち苫小牧市民は、安全で健やかに心ゆたかに生きられるように、平和を愛するすべての国の人々と共に、日本国憲法の基本理念である恒久平和の実現に努めるとともに、国是である非核三原則の趣旨を踏まえ核兵器のない平和の実現に努力していくことを決意し、この条例を制定する。

(目 的)

第1条 この条例は、本市の平和行政に関する基本的事項を定め、市民が安全で健やかに心ゆたかに生活できる環境を確保し、もって市民生活の向上に資することを目的とする。

(恒久平和の意義等の普及)

第2条 市は、日本国憲法に規定する恒久平和の意義及び国是である非核三原則の趣旨について、広く市民に普及するように努めるものとする。

(平和に関する交流の推進)

第3条 市は、他の都市との平和に関する交流を推進するように努めるものとする。

(その他平和に関する事業の推進)

第4条 市は、前2条に定めるもののほか、平和の推進に資すると認める事業を行うように努めるものとする。

(平和の維持に係る協議等)

第5条 市長は、本市において、国是である非核三原則の趣旨が損なわれるおそれがあると認める事由が生じた場合は、関係機関に対し協議を求めるとともに、必要と認めるときは、適切な措置を講じるよう要請するものとする。

(核兵器の実験等に対する反対の表明)

第6条 市長は、核兵器の実験等が行われた場合は、関係機関に対し、当該実験等に対する反対の旨の意見を表明するものとする。

(委 任)

第7条 この条例の施行に関し必要な事項は、市長が定める。

附 則

この条例は、公布の日から施行する。

(平成14年4月1日公布)



【 発 行 】

苫小牧市総合政策部政策推進課

所在地：〒053-8722 苫小牧市旭町4丁目5番6号

電 話：0144-32-6039 FAX：0144-34-7110

E-mail：seisaku@city.tomakomai.hokkaido.jp

(平成30年8月31日)